

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：野尻 紀恵

研究課題名：美浜町における子ども食堂の活動が地域住民に及ぼす効果についての研究

研究の概要

①研究の対象地域における地域課題ならびに「ふくし」の展開

本研究は、美浜町を対象地域とする。

美浜町では、若年層を中心に人口の町外転出が続き、人口・世帯の減少傾向、少子高齢化の進行が顕著である。特に奥田側はその傾向が顕著である。

そのような環境の中、町内での子育ては地域とつながりにくくなっている。一方、地縁の独特のつながりの強さは残っており、不登校や発達障害などに直面した家族の個別情報が地域に口伝えで伝わっていくという現状もあり、子育てを監視されているような息苦しさもある。また、温泉・観光に従事する家庭等の子どもたちが一人で夜を過ごすという事例も見られる。さらに、空き家の利用等により、都心部を離れて子育てをしたい若者世代が名古屋等から家族と共に転入してくる新たな流入層の子育ては、地域とのつながりが希薄である。

美浜町においては、昨年度までに「子ども食堂」「子どもの夜の居場所（子ども食堂含む）」「子育て世代を意識したみんなの居場所」「子育て中の母親の居場所」が立ち上がった。4年前にこれらの「場」が皆無であった中、野尻らが「子どもの夜の居場所」実践研究を開始してから、実践の広がりが見られるようになった。しかし、これらインフォーマルな活動者同士のつながりや、インフォーマルな活動者とフォーマルな活動者のつながりは上手くできていないのが現状である。

さらに、3年間の新型コロナウイルス感染症の影響のため、2018年以降に発達してきた子どもの居場所支援は中断し、そのまま活動を終わった団体もある。昨年度はようやく3つの子ども居場所支援が再開している。

これらの状況から、子ども自身や子育て世代が地域とつながり、安心して過ごすことができる空間・時間をいかに再創出していくかは、美浜町の課題の一つとなっている。

全国的には、子どもの貧困や社会的孤立などの問題状況に対して、各地で学習支援や子ども食堂が行われるようになり、年々その数は増加傾向にある。例えば「子ども食堂」では、地域の潜在的な資源が活用され、数多くの人たちが集いコミュニティを形成することができている。このような取り組みは、子どもたちに安心した食事の場を与えるだけでなく、そこに集う大人もつながり、多様な関係性が紡ぎだされているという報告もある。まさに「ふくし」を地域で展開する地域ふくし拠点となる可能性を示している。

本研究は、美浜町という過疎地域においても、子ども食堂が地域コミュニティにおいて効果的な活動となりうるのかについて検証することを目的に、実践研究するものである。

②研究の準備状況およびこれまでの研究成果

野尻はこれまでに研究代表として「子どもの貧困の連鎖を断ち切る「食でつながるコミュニティ」創出の研究」（挑戦的萌芽研究平成28年度～平成31年度）、プロジェクトのグループリーダーとして「子どもの居場所支援と子どもの課題への具体的な個別支援の仕組みづくり」『地域共生社会の実現にむけた地域包括支援体制構築の戦略－0歳から100歳のすべての人が安心して暮らせる地域づくりをめざして－』（公益財団法人日本生命財団日本福祉大学委託研究）など、子どもを支援する様々なフィールドにおいて実証研究に着手してきた。

また、野尻はCOCにおける「地域課題解決型研究」の助成を受け、2017年度から2年続けて美浜町において既に「子どもの居場所（子ども食堂含む）」の実践研究を継続してきた。その場で起こる事象を丁寧に記述することにより、地域でこのような取り組みが立ち上がることによる効果を実証研究し、報告している。さらに、2019年度および2023年度は野尻・佐藤・村川と市民研究員廣澤の共同研究として地域連携型研究助成に採択され、「子どもを中心とした地域ふくし拠点づくりに関する研究」を遂行し、美浜町における「拠点」の広がりを確認することができた。

③具体的な研究内容は下記の通りである。

（1）これまでの研究成果の整理

1) 美浜町における子どもの課題・障害を持つ子どもの課題・子育ての課題の整理

コロナ禍前までの C0C 地域課題解決型研究の 3 つの到達点を整理した。

子どもの課題行動の実相を調査

貧困や孤立の中に育つ子どもや家族を対象とした学校や地域での支援に関する調査

障害を持つ子どもの課題・子育ての課題の調査

2) 子ども食堂の先駆的実践地の記録の整理

(2) 子ども食堂の実勢研究

美浜町奥田地区における子どもの居場所支援（ふぁみりー基地）の実践研究を行なった。

加えて、本学敷地内 C ラボにおいて子ども食堂実践。

実践の日時：隔週木曜日の夜（関わる活動者によって変更有り）

最終土曜日の昼

実践の場所：NPO 法人チャレンジド（借用）

日本福祉大学 C ラボ

実践の中心：学生、地域住民、チャレンジド職員・主任児童委員等

実践の内容：居場所における遊び・学習支援・子ども食堂・子育ての相談機能

↓

子ども食堂における継続的なアクションリサーチ

- 1) 学生と地域の方々との協同実践の場に、研究者が参与観察者として入り、その場で起こっている事象を記録する。
- 2) 子どもの変容、保護者の変容を中心に据えながらも、実践者としての学生の変容、地域の支援者たちの変容などを重層的にとらえ、子どもの夜の居場所というコミュニティづくりの場で起こる事象を立体的に捉える。
- 3) 住民・学生が相互に情報共有できる場づくり
- 4) ネットワーク化のプロセスの実践・参与観察

(3) 子ども食堂利用者へのインタビュー調査

- 1) 子ども食堂利用者へのインタビュー調査
- 2) 実践者へのインタビュー調査
- 3) 分析
- 4) 考察

(4) 報告書の出版

達成状況・成果内容

以下、報告書から抜粋

うれしそうな子どもの顔をそばで見ながら

日本福祉大学 講師／博士(情報学) 村川 弘城

ふぁみ基地の近くに住んでいます。娘がすごく気に入っていて、できるかぎり家族で来ています。子どもがいろんな人に触れ合えるところが、この場の魅力ですね。子どもがいろんな世代の大人と触れ合える機会は、今は少ないと思います。娘と地域の人たちが出会う場があるのは、親としても心強いです。



学生が主体となって運営する魅力も感じます。「ふぁみりー基地」という名前がそうですが、誰もが気軽に来ることができる。学生が、子ども

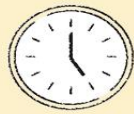
の喜ぶゲームを用意してくれたり、いっしょに遊んでくれたりする。うちの娘も、学生にすごくなついています。

教える側の立場としても、意義のある取り組みだと考えています。社会に出て、どういった活躍ができるのか。大学の座学で学ぶ理論を踏まえつつ、ここで抱いた疑問や課題を持ち帰り、学びにつなげられる。応用力と言いますか、そのとき、その場にあるものを使って最大限努力する。そのなかから、自分自身を見つめ直す時間ももてます。

ただ、講義や大学の仕事で遅くなるときは、さびしいんです。娘と妻はふぁみ基地に出かけて、私は自宅でひとりさびしく晩ごはんを食べる（笑）。今晚は家族そろって来たので、たくさん食べようと思っています。（談）



お腹が
すいたよぉ～



17:00 ▶ いただきます!

料理も無事に出来上がり、ふぁみ基地はいよいよオープン! 本日のメニューは、肉じゃが、きのこキャベツのバターソテー、炊き込みごはん、みそ汁、そして、デザートはヨーグルトプリン。みんなで手を合わせて、「いただきます!」。さ～て、お味のほうは? 美味しそうに食べる子どもたちの表情に、学生たちもひと安心。



いい香り♪



手を合わせて
いただきます!



あったかいうちに
食べてね♪



Message

「ふぁみ基地」 Report



おかわり
あるかな?



考察1

社会変革に挑む学生たちの力で「自分らしくいられる場」が生まれる 原田康信

2024年12月の夜、ふぁみ基地で恒例のクリスマス会が開かれた。半島特有の寒風を受け、いつものように玄関から入ると、熱気に満ちた風景が広がっていた。「こんばんは。まだご飯ありますよ！」と4年生の日江井さんに声を掛けられる。常連の親御さんが、子どもを膝にのせて親同士で歓談されていた。私の姿を見ると「久しぶりですね」という声を掛けてくださり、「よその子が膝に座っているやん」と私が突っ込むと、「そうなんですよ（笑）」と返ってきた。子どもだけではない、大人もこんなに表情が緩むのかと、この場の持つ意味に改めて気づかされた。2023年にふぁみ基地を再開した際、学生らは手始めに、地域の子どもの食堂や社会福祉協議会にヒアリングを行い、運営手法や地域課題等を調査。自分たちの場のコンセプトやイメージを描き、調理に関して試作を行い、食材の買い出し先を選定し、経費の概算や調理手順を確認。ゼミ生同士で共有していった。準備の最終段階で力を入れたのは、場の仕掛けづくりであった。室内の飾り付けやメニューボードを作り、折り紙やボードゲームを準備。

そして迎えた再開は、1組の親子だけのスタートだったが、その1組をいつもと同じように出迎え、徹底して遊び、楽しんだ。その後、チラシ配布やSNSでの情報発信を積み重ねた結果、地域住民の利用は広がり、食材の提供を買って出てくださった生産者自身も利用くださるようになった。その基盤には、日本福祉大学の長年にわたる地域との関係性や認知度、ゼミ教員の野尻先生と地域福祉、教育関係者との信頼関係がある。学生らが繰り返し真剣に場の意味や運営に関して忌憚なく話し合う循環が、今のふぁみ基地につながっている。ここには、学生らの固定した役割がない。今、できることをできる人がやるというスタンスで運営している。そのため様々なアクシデントが起き、そのたびに親御さんや地域の人らが、アイデア出しや手助けをしてくれる。みんなのお節介りが作動する。その場をみんなで創る、支える力が生み出される。自分ができることを自分らしく発揮し、ふぁみ基地を動かす学生たちの挑戦は、従来の地縁血縁中心のつながりを超えた地域づくりの一つの手法であると考えられる。子どもも大人も関係なく、一人の個人として、みんなが自由に行き来できる場の創出は、学生という地域のしがらみのない存在によるもの。それらは意識変容、社会変革の原動力となる。ふんわり温かい場であるふぁみ基地の源泉には、活力、力強さが満ちている。

考察2

学生たちが子ども食堂をやってみたら見えたこと 野尻紀恵

子ども中心のコミュニティからは何が生まれるのか

2009年頃から日本においても、子どもの貧困が社会問題であるとして取り上げられるようになった。子どもの貧困、孤立などの問題状況に対して、全国各地で学習支援や子ども食堂が行われるようになった。例えば「子ども食堂」の取り組みは、今では、全国で1万ヶ所を超えていると報告されている。「子ども食堂」では、地域の潜在的な資源が活用され、居場所というコミュニティを形成している。このような取り組みは、子どもたちに安心した食事の場を与えるだけでなく、そこに集う大人たちもつながり、多様な関係性が紡ぎだされている。しかし、これらの取り組みは、豊富な実践報告がされてはいるものの、その実践コミュニティがどのように形成され、どのようなつながりが生まれているのか、子どもたちはどのように育っているのか、などの詳細な実態はあまり明らかにはされてこなかった。そこで、子どもを中心に据えたコミュニティ形成の様態を参加者の変容という視点から、明らかにしたい、これが本実践のスタートであった。

「ふぁみりー基地」に込めた場の意味

「ふ」 ふれあいの場

「あ」 あんしんできる場

「み」 みつけることができる場

「り」 理解しあえるきっかけの場

「き」 絆を感じられる場

「ち」 地域づくりにつなげられる場

「ふぁみりー基地」に想いと願いを込めて、実践活動を継続している。

子どもの「声を聴く」居場所へ

地域における子ども支援は、「地域の居場所と学校との接点ができない」「情報がつながらない」「子どもの生活課題に必要な支援が届いているとはいえない」「それぞれの取り組みが点であり地域に支援の面を作ることが難しい」「この地域にどのような取り組みがあるのか活動者自身も把握できていない」というような課題があげられる。地域によっては過疎化の進行による子どもの数の減少や地域住民同士のつながりの希薄化、そして、ひとり親家庭の増加による家庭の孤立等といった問題も深刻化してきている。

子どもや家庭の困り感は、いや子どもや家庭が困っていると感じていなくても、子どもや子育て家庭が地域でつながることはとても大切なことだ。地域にはさまざまな専門性をもった専門職がいる。さらに、インフォーマルな社会資源もある。それらが地域全体で子どもや子育てに寄り添うことが、今、求められている。

これまで、子どもは「子ども支援対策」の対象であり、子ども自身の顔が見えない状況が地域にはあった。私たちは、子ども当事者から学ぶことが必要であり、子どもの「声を聴く」場所としての居場所が必要である。さらに、子どもが自ら選び取ることが重要であろう。

お互いが互いの空気のように存在する

アマルティア・センは、ケイパビリティ・アプローチという考え方を示した。ケイパビリティ（潜在能力）とは、ある人が価値を見出し選択できる「役割」の集合のことである。その人に何ができるかという可能性を表している。これは、子ども食堂の場作りにとって重要な考え方であるといえる。

また、レイヴ&ウェンガーは居場所で当事者とスタッフが状況を共有することは、「社会的環境の中にある共同体で行われている社会的実践のために必要な場」であると述べている。このような状況を共有することによって、スタッフは当事者性を深めていくのである。つまり、子ども食堂であれば、子どものまわりの人が子どもを理解することが一番大事なことだ、といえる。

そして、子どもはそこに集う多様な大人から生活を学び価値観を見つけ出すかもしれない。そこに集う大人は支援者でもあり、子どもから社会の矛盾や課題を学ばせてもらう学習者となる場合もあるだろう。このような相互関係が存在することに、このような「場」の持つ意義がある。参加する子どもたちの笑顔や変容は、スタッフ自身が参加者を「支援対象者としての子ども」から「輝き、力のある子ども」へと捉え直しに導く。

「ふぁみりー基地」には、その人を理解しよう、ともにこの場を過ごそう、ともにこの場を創り上げようという想いや目を持っている人がたくさんいてくれる。それは、野尻ゼミ生であったり、子どもたちの保護者、地域のおじさんやおばさん、地域の生産者、障がいのある地域住民、専門職のみなさん、そして何よりも子どもたち。全ての人が、子どものまわりにいる。それは、まるで空気のように必要なことである。お互いが互いの空気のように存在する。